

「神話の知」の現代的意義

市川 浩

「人間は長い間、物語を持った神話的な空間の中で生きてきた。どの社会にも、たとえば聖なる山や聖なる木というような中心があった。そうした中心的な価値がはっきりした空間の中でこそ、人々は自分のいるべき所を得て安心することができた。」

そして

「影の部分や物語を失った空間では、人間同士の関係も表面的でよそよそしいものになる。それに耐えられないという人々が出てくるのは当然であって、均質化に反発する動きが今後は広がるだろう」

しかし「神話の知」は「自然科学の知」と異なって人々の共感（と共通の記憶）によって支えられているものであって、この生命力を失うと、ただちに「迷信」へと下落してしまう危険性をはらんでいる。

『都市の構想力と生命力』

その時代、その時代を支える空間というものが、国家の繁栄と市民生活はこの空間のあり方に大きく依存するのではないか。

空間の持つ構想力とは、大きな力を持つ。今日我々の都市空間に対する課題は、この構想力と生命力を取り戻すための仕掛けを、現代の都市空間の中に埋め込むことがどのようにしてできるかである。

機能的解釈論ですべてを説明しようという(近代)都市分析、それに基づく都市計画からそろそろ決別すべき時期ではないか。

機能的、実用性のみに限定せず、日常経験至上主義を超える見方で都市空間を分析する必要がある。

『その時代、地域の視点から見る』

その時代の空間システムを現在の視点からみるのではなく、その時代の視点から明らかにすることが重要である。

その時代を生きた人々がどのような意味と精神でその都市をつくり、また住んでいたかを知らなくてはならない。

空間を本当に見据えるには機能性、実用性のみ限定するのではなく、空間の持っている意味象徴を問題にしなければならない。

目に見えるものは実際にある人間社会の姿の一部に過ぎず、目に見えないものを現実に繋ぐものが象徴である。

『コスモス(宇宙観・世界観)

人間が生きるためのより大きな枠組みの提供』

プラグマティズムに考えれば「もの」が自ずと意味を持つと理解されるが、実はそうではなく、むしろ「意味(宇宙・世界観)」の世界の中に「もの」があるからこそ意味を持つ。

俗なる空間を王城という象徴的な空間でコスモス(秩序)化することによってカオス、俗、現実空間に統合化の力を付加することが可能となる。

混沌たる空間の中に意味世界を創建し、現実生きる意味付けを与え、さらに方向性と安定を与える。

『風水思想と首里城』

首里および首里城が風水の論理に基づき建都され、建設されたかは不明。

しかし建都されて後に、この知が風水にかなったかを占った事例あり。

『球陽』巻之十（1713年）都通事・蔡温

「首里城は、竜脈の集まる所で甚だ好ましい場所である。……」

後代、決して改建しないようにと述べている。

『風水思想の浸透過程』

風水思想の浸透過程

1543年、冊封正使、陳侃『使琉球録』

「正殿は以前、南面していたが、風水に従って西面にした。……」

1719年、冊封副使、徐葆光『中山伝信録』

「正殿は南面していたが西面にし、城外の石崖の左に竜、右に虎を刻した。……」

(4) 都市空間の象徴とアーキタイプス

都市空間の衰弱

都市空間それ自体がどうも衰弱してしまったように思えてならない。その理由の一つは、現存の都市分析が経験主義と機能主義に基づく計量的な方法のみに依存しすぎているからであろう。

都市を分析するときに計量的な方法のみに限定してしまうと、空間に限らず都市の現実世界（プラグマテックス、機能主義）の面のみに視野が限られてしまう。そして都市の可視的な部分は良く見えるが、不可視の部分はますます見えなくなってしまう。

しかし都市は、その中に生きる人間の意識のあり方によって様々な様相を示すものである。機能的解釈論ですべてを説明できるという一元的な考え方に対して、目に見えるのは実際の人間社会の一部に過ぎず、目に見えるものを見えないところで規程しているものとして、レヴィストロースは構造主義という概念を提案した。そして構造と目に見える現実を繋ぐものとしての象徴を定義した。